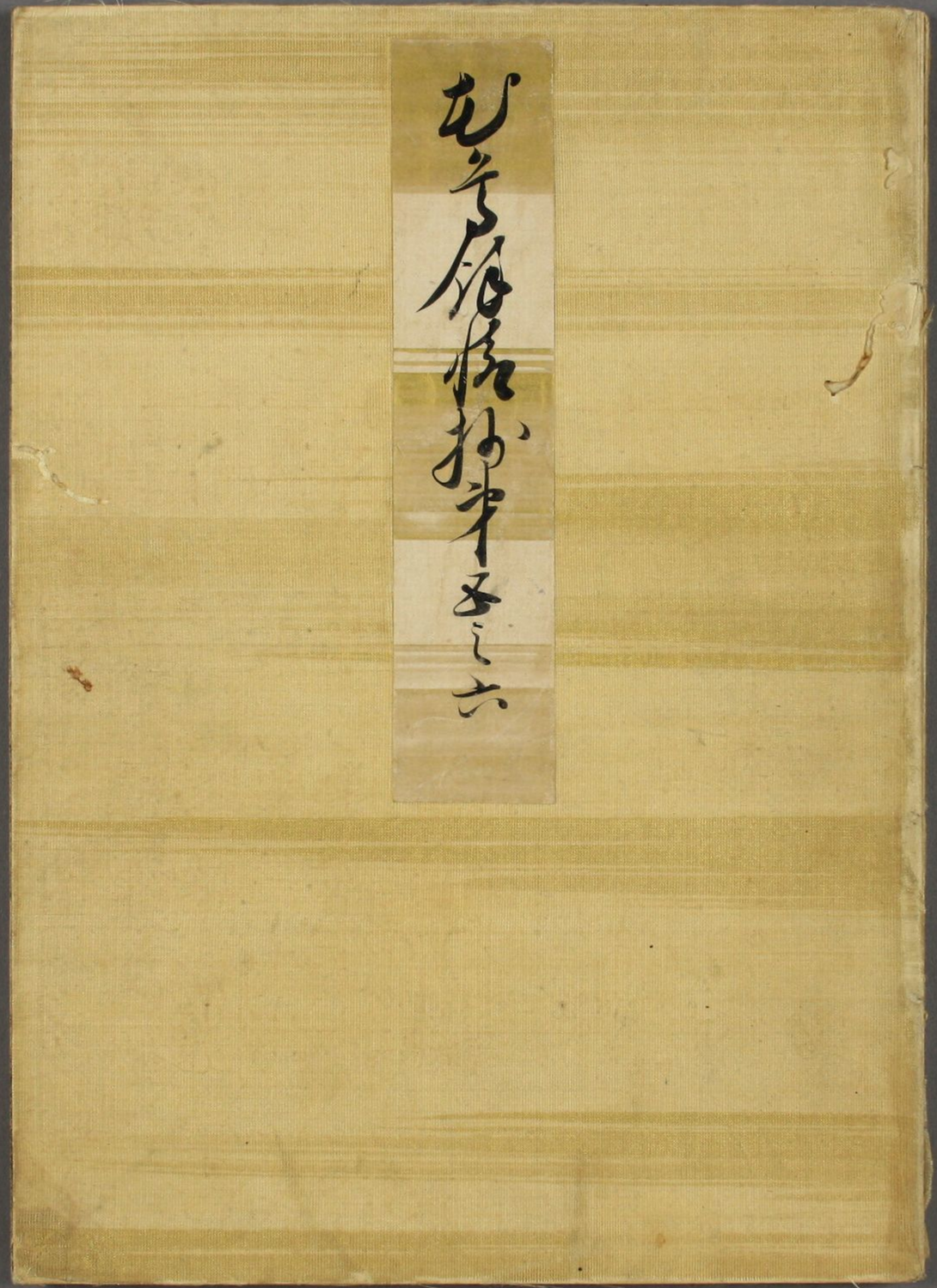

九曜文庫

花鳥餘情第五

四　紅葉賀

詞をとるもろく巻の名とせる也仙山名よき紅葉の賀とたゝさるゝ風情を伐木(こかり)の日やさしくしうつくしき紅葉の賀とわひとおりの花宴(ハナノエン)乃名よ源紅葉の賀とわま藤裏葉(フヂノウラバ)の巻よ六条院の行幸の所ゟ朱雀院(スザクイン)のおり紅葉賀まいのる事おゝしそれとおりわさまこれをとりわさなく物語ゟ利玉のなをとるもろく

紅葉賀(モミヂノガ)　花宴(ハナノエン)

に神泉のもみちの賀をこうしたまへり延
喜十八年の秋の花の宴の賀し給
ふとあり又雪の賀といふ事あり承和
の御時紅梅の賀おこなはるゝ事ありこれ
らの名目を例とせらるゝ也是は源氏四十
七歳の十月より明年の十月までの事
なるへし
朱雀院行幸は神無月十日あまりのほとか
つけり
此の朱雀院の行幸は宇多御門の御賀なり

おもひやりのゆへに延喜十六年三月
七日行幸朱雀院有法皇五十御賀云々
醍醐御門の御時朱雀院とは寛平
法皇の御事也五十の御賀は三月の事なるか
なをこの物語は十月のもみちのをりなる
したゝめし此巻に一院とかく事ありしを
なから寛平の御門にあてゝおもふへき
ほかの御在位の中より一院崩御のよしみえ
さるは寛平法皇は延喜の御門崩し給ふ
後くれさせ給ふへく

青海波(せいがいは)の盤渉調(ばんしきてう)唐楽(とうがく)うつくしき人の神(かん)さび
ようき添(そへ)てうたひ相遠(さうゑん)うつる色(いろ)〳〵
やうすさまじきまでうつくしう人の人ゝとまもる
なかに風(かぜ)まことに吹(ふき)まよひきこえたるもをかし
もれ満(み)
人々御門(みかど)その朝(あした)いうことにあひつき
あいそうをつくし風雅(ふうが)の事(こと)にほこすてゝ
青海波(せいがいは)に唐(とう)ふなれいたうふけぬ
をうへ人ゝを折てうたふ人の神(かん)さびようみえ
つゝと源氏(げんじ)の君(きみ)ひとり行てやうのかはり
さまもしうみえて袖(そで)うちふりたまへる
東宮(とうぐう)もおはしましぬ
延喜(えんき)十六年の三月の御賀(ごが)よ有仰(あふせ)令喚(よばし)
望太政官(もうしのだいじやうくわん)ゝ此時(このとき)
未(いまだ)きもみちのけ
見(み)ぬ御賀(ごが)九日(くにち)の事(こと)を
山の松風(まつかぜ)ものゝ山おろし
朱雀院(すざくゐん)の池山(いけやま)
うつしのもみちてうちりをゝく
舞(まひ)のもとにいと深(ふか)のもちの枝(えだ)をおもし

へもうらうへ女官ニ申うにいりてえニ
乃御菜ニも内膳司のれうをい宮女
役送ニて女蔵人へつうへ女蔵人へそ
むのそなりわうをえ又御厨子所宮女
乃中をえひく得選ニお川まて将選
役送ニて命婦よはうへ女ニの典侍
りいわうをなのりうみう節会乃時内
膳司の時内膳へいう宮女ニれと御ニ信膳の
う物へうく机をもちよりうひ
ゑ上臈ニもうりて下臈ニもうる事ニう松の

事いうきうき松のれとうの代よいも
ふ人もわうくみの中人へ
この物ニうる事ニうて
うのれとうの次第ニうてい
ものうえわんひをそやうをいなま
いさうる

これうい源氏のすうゑ

ゐうちきう人すうゑ

蔵人私云十三ニ御髪御髪事始ニ
擬堪事ニ人信受例ニ云ニ尚侍

謂之市禰（イフコヲ　ロヂキト　メムロ）

今業（ナリワヒ）　ゐやしきつまひらくとて人ゐの
まぢめのるばし
人といふなれ

ゐやしきつくりそめしより

能宣集（ヨシノブシフ）　人のゐやしきよみあきたるに

ゐやしきつくりそめてよみあきたるに

と業（ナリワヒ）　なりてしうの法（ディ）よめりそれを

ゐやしきや

古今集　ゐやしきの一村をきりのこしたるに

おとこのこころをれいたるとあり

今業（ナリワヒ）　大ゐやしきの杜（モリ）の下ゐこともそきかれ

ゐやしきの杜の下ゐのあふ事

ものも毎（モリ）の下ゐのいはまいともりおほくも

もりつくるものなりけり

蜻蛉日記　さてもをいわまでそ

と業（ナリワヒ）　こゝろもしらでもりつくる源内物のとかの河

て思ふ（ダイ）
うの心を卓文君（タクブンクン）
さうして白頭吟（ハクトウキン）
是とみて
つもりて
ちやうにして
よめるうた
毎もの
うそいうこと
今もあるやうにも

君（キミ）
まで

藤つかの御事を思ふ
おこりなり
おもしろきうた
うへのうきに
おもひやるを
いとしなもの

内侍（ナイシ）のかみの修理（シュリ）大夫（タイフ）
ひとといふこと
君（キミ）

あるあらばよんでさそはんといひつゝみなよをせんいそ
よなきそんいそのえよりもふうしくく
うつゝ人そそうしきそれんん
もろうしそれんん

常陸中将のもとへ
ふみをつかはしたるに
聽恋衣人しれぬ
あまえ今の世をもとの御帯にせん
一つもしもちぬふ夜の恋衣こそ二
藍或は花田ともにうてゝ夜を源氏

八宰相中将ねうに二あひなりけ中ね
えゝいとうるはしき御ありさまにて
元二藍の恋衣と宿をかりて
うるはしき宿直物をとりいれたるをとりいれたるを
うき恨とりわきてしも萩襲の名よ
夕霧宰相中将のもとへ源氏を
夜のふそ北泰誠のてうふとなりぬ
うつゝ人そ二あひ井にうけまとの紅利
北泰誠とい二位三位なとの中ねをてふを
てうゝ多雪八座り昇進し給事れ

まて花田のるをさそふ水とてや
榊(サカキ)の葉よ源氏の帚(ホビ)とうたゝ二わひなゝわひ
乃御そよもり行くとわりいまゝ
いこなゝ二蓋(フタアヰ)のしいわるをそうりを通
姫ともいふ紫(ムラサキ)氏(タチナシ)亦衣の帚(ホビ)に下蕨(ヒタカサヨ)衣
乃文ともちふ我(ワ)紫(ムラサキ)色(ショク)人冬蘡芳(フユスヽハウ)而白堂
吟 袁活打手消 哀浪打後
夏蘡芳(スヽハウ)遠草 二蓋(フタアヰ) 裏 おかうる今も
文生
亦衣とうたゝかとの人いる我一の色をも
ちゐ乃文ゝ赤(ヒト)人下うねう色を

うちのへき事うるをうたゝ人のかと
さ〇とりわうの吟俊(リヤクキ)を見てわり
これもちてを紗へと
源氏のる物乃
中をいうもあやうたゝ帚(ホビ)とうてはよを
石川のまゝとを本おひとうれうき
くるをいるおひそうのおひの本
たゝう 能馬示呂
石川
今楽帚(ホビ)を人今かうしうる石川のう
便(タヨリ)乃利久

あゆまち[illegible]道の果なり[illegible]
とおき[illegible]帝(みかど)[illegible]とよ[illegible]
乃かてい(カコト)ず事のつ[illegible]
かう[illegible]事とゆ[illegible]
こき二首(アク)ら[illegible]
よみあつめ[illegible]
う[illegible]
[illegible]
[illegible]

五　花宴（ナノエ）

此巻の初めとりて屋乃名とせり　但春乃詞
なき南殿（こでん）の桜のさかりに宴せさせ給ふことあり
おなじ二条乃后の春の宮（えん）の花のさかりに
あまたの度ゝ行幸ありしときこえ給ひしうち
の桜を脱（ぬ）ぎ給ひしなどいへる事なりこれも私家（わたくしや）乃
実なれば花宴（くわえん）の桜乃宴（えん）とやくは名（なづ）

月と女房とんでさる例
国史云弘仁三年三月幸神泉苑覧花
樹命文人賦詩賜綿有差云
花宴ノ濫觴也云伝ヘ
宮寧相中将正三位ニ
来乃ちきの廿日わもり南殿のうへん
をこなひ
桐壺帝門ニ飛御の帝よりはじまるなり
はるくらの御宇よりはじまるなり
延喜十七年三月六日常寧殿花宴
詩題 春夜翫桜花 延長四年二月十
七日清涼殿花宴 詩題 桜繁春日斜 探韻
此両度ノ例ニ依テ作文始ル事ハ
弘仁ノ比ヨリ有之常寧殿ニ
花のえんも宴席ニ清涼殿そひ
うるおひありこの御ぬのまてえんも南
殿の桜と御製あり宴ニ清涼殿ニ
御ありおくれたるとも思つゝ但
両度の桜との統の事い 村上天皇康保
二年三月植桜樹於南殿有花宴 詠古

詩誦新韻ヲ試ント探韻ヲ乞ハルヽ事ハ
ムカシヨリ有ル事ナレドモ題ノ探ル事ハ
古世ニハ乃チ事ヲ記シ拠ヲ用ヘ
ル事ヤウテイ朱蕃院ノ天喜三月
十六日仁和寺殿花宴ニ紫花樹暮雲深シ
ノ題ヲ探ル事ハ物語
ノ花ノ宴ノ初ツカタノ門ノ名ノ事
ナリキ又ノ世ノ廿日ノ事トヘルヨリ
ハ延長ノ三月ノ宴ヲ思ヒヲヨセテ
ヤ云ヘル作ル

ソノ心ヲ探ルヨシ
ナリ

先ヅ一儒者奉仰献題次書韻字盛
中椀置庭中文臺上近侍次将先探
御料韻二字置筥蓋昇自御前階献
之次王卿堪属文者文人ホ各進文臺
以探一字見之奏官姓名及所探字
也

今案探韻ハ各ノ一字ヲ探ル事ナリ
韻字ノ多ク故懐紙端作ル事日同賦

春夜翫櫻花各分一字應製詩　採得共字

和漢書之句也

宰相中将といふ文字落されたりと

花のえんの時の事といふ詞の字はあひ

所あひあふ事は源氏の君は栄花の事を

思よ學くべきなりせ

さくらふるさとしろくあはれなり

まへは朧月夜の内侍人をはしろき時はよる人

目もくるしみ花もしてあはれを鼻のさ色な

えならぬことゆゑなき

楽とは何事ともいふを

花の宴は御遊ありて舞楽ありし

こし天暦三年三月十一日二条院ノ花ノ

宴ノ湯成流　同月十二日内裏仁寿殿花ノ宴

各有舞楽即奏春鶯囀　又地下伶人

ありけり殿上の舞はなにとこの物なり

なるひ面影もあまはあはせりわたる書

あしもあるも

こまはいはまとうしすてして

楽の中ねんはさういうひらしくまへは作事也

そうしき例(レイ)の人なり
花宴(クワエン)の日殿上の舞(マイ)人勅禄(チヨクロク)を給はるに
とうし式例(シキレイ)と
称(シヨウ)するもかうなり
詩を奉(ホウ)献(ケン)するに庭中にて文台(ブダイ)
とうきく御前にて文人ども階下(カイカ)
にすこし溝頃(カウジヤク)とる
かうらうきこう
荷(カ)つかの御んもの房(ワラハ)重命婦(ジユウミヤウブ)など
事と

こきてんのかうそれを三
ろうわきろう
三の字いろはにほへとちりぬるを
うよの戸こわりの内に源氏の名
ゐのおくやまけふこえてあさきゆめみし
きこもすんのをとをかのとの原をいとい
しもとやとうそ紙源氏のかう

なく唐土(クワド)のいま婦(フウフ)乃約(ノ)とのはたらき
有(アル)ことなり事(コト)ある是
六月(トウクワツ)居(ヲ)まし宮(クウ)りそもそも
昨日(ヨヒツ)夜(ヤ)にもれうちこの乃ち
もの乃(ノ)ごとく同(ヒ)じのうちの
の法(ホウ)ともの(ノ)ひのうへの事(コト)と大(ヒロ)く約(ヤク)れと
妻(アフヒ)のうへを宮(ミヤ)家(ケ)ぬ
ぬちうかの中(ウチ)文(ブン)乃事(コト)をいふやうにも
ひろく称(ホメ)ことも中(ウチ)
んひのいふもつきうへ

其(その)日(ひ)浴(ゆ)宴(えん)の事(こと)あり
浴宮(ゆぐう)とは若男(わかおとこ)嬬(づま)をめとりて三日(みか)
宮(ぐう)の法(ほう)ありて事(こと)
をいふなり
かうの末(すゑ)のへいてや
昨日(きのふ)夜乃(よの)ことを思(おも)ひて
ものきみとよろこびありけり
り御(ご)ありてとも
なり

きるのちん
中童(ちうどう)ぬの渾(ぐん)
玄(げん)輝門(くわうもん)のうへ

ここてんの御あわれ
御あまたの内うち退出（タイシュツ）御ふすま
御刺
ゑり赤いろよつまつくり
ひとさしの姫君事へ
手のそこ〳〵ぬきいさくて
多勢（テナラ）ぬ参をうつくいあつさと
るやうな刺
と桑 桜のそもやう白（シロク）うすもえ
こそそこにすうる白をこうさ

ひとさしのそうとうて白をそこる
刺や
ふしもあつそこそ仕もの白の
吉収宿（ヨシミワクシュク）
玉の貫仕様
この方ととうく頭巾を羽を
もうもとうもくくしき事ら倍（ばい）も添
武ふくろんうとくいて母会の事とそう又
まりうんせ参ロ
もや添へ

古今序にわかのおなかんはすそゆかりしと
よめるを並へりひとつつゆかれは序
のよ乗りなき事ともなともそく
けるを定家卿の序はおわくにこの地能
なりそなりとみてゆり
生駒山つきむらそ見なかなかくもおて思のさゆかり
これはなぜ序は雲なくしうとはりへて雲
といさかゆかんなれは庭かそつきむからねとん
をよもくくともゆかくこの絹よあひかなや
かなれはよりをつかふてかれと筆の流り

中ゆかなり大方源氏なとと一巻んをかく
ちなとくりよもんなとよまんよそりては
序かなき説を用へておかいは我志てをしてて
いつと思ゆく紹巻はいときなき人の母ち
さもし付ゆりき
夕くてのうのきみ此はなをし
御幸巻に　六条院はさくてのつの三代御
なかしいまやう文の雨ちひきかさうく
志とけなきおかきみをくつよくせとと
通んすとなし

今案 此物形二而如一物之
事とうもうきの地の多くありて
てもよいを一をもてと
つるめもの一つ把二重ねりその
と唐綾を
の表の面ろさ
藤花のうえにひて
ごりつるひて
ごりの袴と袴の衣のそとをつる

而宮ゑ上膚着直衣下着下襲随使不
常事ら
今案 袍よ下
よ上下用之事
依人事と
帯の丸鞆と或皮帯をゆり時何と
着蒔絵野太刀と
わきに仏あるおかきと下すること
沛事表よ三
ごりいわきまて

堂の袍よ指貫と云て裾を引あつ
袖の事と垂衣よ裾をとるに至てなた
あることもいつへ一あされるにされるかと
いつもまゐりあふ大きみを
まゐの宮の大人のそうそくとてゐんの判
又雪夜すること大きことと
よ玩あり

ぬさつくすまうちつかうまつり仲
てう

栄花物語よ枇杷殿 妍子三条院后 通生公女 乃大

饗よ女房乃袖口 とて小野宮右大臣実資云の雑事
ことありつの物語 女房のうち云て袖口
のうちいる 袖口 ぬりまゐりつかうまつる
いさりつるとや 袖口 そうやうにも
と思あくる 袖口

伊勢物語のさく花のそこう同人ハ
ひさしい業平中将の汗平中物語のもと
みくうりよりの忠仁公良房の苅萱氏の祖ト思よ
うくくもろうし二条のきさきハ忠仁公よりてくみす
そくもろもろとハ源氏の君ハ
苅萱のそうもそう羽
ようぬくそやんくもれきゆうりいうこう仏から
祇

ここてん乃西服の女一ハ宮女三の言ハ
お源氏ハ姉妹にくまもすおうり
ーき人そもうし
とうぬ房もありうし
あうきとくくいうぬみうとうをとけ
ありもうりひみて
源氏ハ君あうきのぬをとうんぬうる
ひ事り石川のこまうんのひとう社
あうきくひとうふとあうきとう
祇くというあうきのぬやそ

花鳥餘情第六

六葵

秋ぐさの末葉の名ども多き源氏二十一二歳の
事はさまざまみどころ多かるべし其中に葵の
巻の時代の事をとりわきて論ずるは此巻の
初めを葵の巻と名づけたるなるべし藁（わら）説（だ）り此
巻を葵（あふひ）の巻と名づけたるは此巻の内に
葵の祭（まつり）の事の有（あり）て一段と二条院（にでうのゐん）の
院（ゐん）乃（の）藤宴（ふぢのえん）と云（いふ）事（こと）有（あり）て此（この）二月下旬（にぐわげじゅん）の事（こと）乃（の）
歌（うた）有（あり）て此（この）巻（まき）の名（な）とせり源氏（げんじ）の
事（こと）は毎月（まいげつ）毎月（まいげつ）のごとくに

乃日数も多く経よ朱雀院の受禅冷泉
院の立坊源氏の君乃任大将并流罪宮
のト定并第〻の幸い次のごとくなる
事なり二殿云花宴并源氏宰相中
将乃事并源氏十九歳
三殿云花宴并源氏十二歳ひの
春乃事并新枕の事并大将為
頼乃事并十二歳にて夫婦
となりし事并聲書
二歳にて身丈寸にて十一歳の時
元服并初めて二条の后を
妻として二条の后
初め立殿云斎院の御禊并二度の御禊并葵祭
并賀茂の御禊并

おの〳〵物の初度の祝同日
の事い共式例ありさゆへ六条の伊勢祢宮
を一代ゝ一家といふ世のゝ秋好中宮の
奇文をもて給ふ事い朱雀院受禅のね
乃事ゝこゝよこれまてゝ事ゝいそらゝへ
まりゝゝへしとゝめゝさゝる事あ
るゝこの社会ゝれい朱雀院
のゆつりをうけのゝ事い養の奉り利
ゆまゝゝとゝろゝ一こ乃六女の競りて
源氏の任ゝある世一のゝ事とゝろゝ

物なり
世中ゝうゝあゝちゝ後川ゝのゝをおゝりれ沸
為ゝやん事ゝおゝさゝそゝあゝへ
よゝ中ゝうゝとゝ相ゝ乃御門志御位
と朱雀院よゆつりゝの事ゝこの事花
のゝんゝ年ゝの吉年ゝのゝなゝゝて
ゝし紅葉賀ゝ奏よゝ門ゝりゝゝ名
いゝんの巴ゝうゝひゝとゝわゝて
ゝ花のゝんゝゝ夏秋の事ゝうゝゝき
ゝやゝ後川ゝうゝとゝゝ女ゝの中文ゝ

冷泉院と申す事ありそれは
桐壺帝の第十の皇子にて
母は弘徽殿の女御と申し
春宮(とうぐう)をはじめ
朱雀院(すざくいん)
女御(にょうご)と皇太后(こうたいごう)
春宮(とうぐう)
冷泉院(れいぜいいん)と申す事ありそれは
桐壺帝の第十の皇子にて
母は弘徽殿の女御と申し
春宮(とうぐう)をはじめ
朱雀院(すざくいん)
女御(にょうご)と皇太后(こうたいごう)
春宮(とうぐう)

息所(ヤスドコロ)のり斉宮(サイクウ)トゐた去年(ホクゞヤウ)の事ある人
きこゆ秋(ク、ミヤ)をゑよ今ふらんとくりす
おもろう明幸(ケウ)い辞行(ジンキヤウ)のとわるへ
まつ常りゑんうありをるさ
萩つゐ中ゑきまりおひる
女もとをきされうひろ
御息所(ミヤスドコロ)い廿九源氏い廿一うれをみる
きといなれ
わさうの姫君(ヒメキミ)
源氏の君うたるくるといわぬりそな
と今ゐこれろと源氏の君もゐまつゑ
とつをくよ引節
まろくといふ詞い兎乃角(ウサノ)とりうさき
のみをつ乃とゐろまりをまつよ
ろてふくふとするもそそ
もくそをといふこぐ出まうと
んうきさぬりろうの事も
あつひのうへの作ろうの事
やうのおかうりいて御いてまつて

をも六条をも百人ごとにおかれ
事となり
其の外斎院おりゐ給ふ事なども
斗ある

延喜式云仁定斎王畢即ト宮城内便所
為初斎院即先隈川頭萩潔禊乃入
又云斎王於初斎院三年斎畢其年四
月始将奉神社先擇吉日臨流萩禊
即廻帰便留野宮
又云仁斎王毎年四月中酉日発上下

両社祭

今案賀茂の斎院へ入給ふ初斎院と
東河のそこを指て御禊ありくれち
なくよ初斎院へ入給ふ大門
其中大膳職或左京近府あとを点してそ
祓ありく三年潔斎の事あり甚しきの
日ゟ西社へ下りもてまいりそまりまで
両ゟ吉日を撰て又沸禊の事あり是を
ち栄曼の野宴よりて入給ふこれと二度乃
禊とぞ聞ゆる中の酉の日賀茂社へ参給

て条事(ニウリコト)ふ玉てこうの毎年(ヲイテ)例祭(レイサイ)いら
なつを午(ムマ)の日こしを限りてこれを例祭の日とし
うりつかの門の山車(ダシ)(ホウキャウ)両(フタツ)ト定(サダ)めり
両町共(ニチヤウトモ)に一(ヒト)組(クミ)の例祭(レイサイ)の頭(トウ)(カシラ)ずつ
出(イダ)し祭礼(サイレイ)の日(ヒ)に至(イタ)りてこれを以
て入(イ)れかえその二度(ニド)の頭(トウ)(カシラ)を以
てそのゆく動度(ドウド)の頭(トウ)(カシラ)を勅使(チヨクシ)奉迎(ホウゲイ)一人
仕(ツカマツ)るを二度乃頭(ニドノトウ)(カシラ)といい大納言(ダイナゴン)中納言(チウナゴン)参議(サンギ)
ハトあるを例年(レイネン)の頭(トウ)(カシラ)をいう
うち仕(ツカマツ)るを仕(ツカマツ)り式(シキ)を云(イ)いけいの日(ヒ)ん

ぎり先(サキ)ずさきまりの事(コト)のれとうち
あるをいうを延喜式(エンギシキ)よ二度(ニド)の頭(トウ)(カシラ)乃勅
使(シ)(ツカヒ)大納言(ダイナゴン)中納言(チウナゴン)参議(サンギ)一人宛(ヅヽ)を名(メイ)ず
み位(クラヰ)四人(ヨニン)をもつて定(サダ)めるといいり源氏(ゲンジ)のあるく
をかとそまりてこれとりてとをいふ
汝二人(ナンジフタリ)の中(ナカ)なるべしとこれを二度(ニド)の頭(トウ)(カシラ)
よ山車(ダシ)をよりるべし
おもは海(ウミ)をにもこれをいなかの
くりくまりをわくるにより
志(シ)ろ祢乃(ネノ)文(フミ)のそ海(ウミ)のもんひまりる

ごちく

れ禊乃月九勅使公卿ハ梁楽来ヲ奏ヲ
馬ヲハ唐鞍或倭鞍ト用ふ本葉ヲつくる
大将の奏てくつり添
国史云貞観三年四月十二日丙辰賀茂
斎内親王臨鴨水修禊是日使入紫野斎
院勅大納言正三位兼行右近大将源朝臣
定監禊事ゝ
乃例ゝ
御前
地下乃前駈ゝ
お張のをこるしくつり下をそしりさま
凡車ハ唐庇擯榔庇毛車ホハ簾ヲ横ヘ
りくるゝ左眉半蔀網代等ハいれ
あとをまりいまゝ師息ホ乃ち張ハいまゝ
ゝくりくり但左眉にをあゝ未濃の下す
每車ゝくわ張の車ハ下をそしをら
をそゝ人ゝも女房ゝ宗用するハ八葉
の車ホも下をそしをら事ハ伽れを
そゝゝても相遠なりくゝ

めもあやうきまで乃父とみうしな
ひて　後指導後頼守
おもふに拠とみやとなりともわやくとなるまじ
けりもあやいうもあやうきまでに武勇
幸をそうそうの心りをいん殿との
大将乃うれをいん殿との
ゆいつ称乃ことにわれ先うて
幸おとれることなるを第一の大を第人のそ
うしてまうのをいもんとふて一員と
もの以くおとを私乃将監ね曹司生
を二人作うりうちて義よりて随分を
はて幸をとそ利わてくお社のふ
毎年いるそう利をそ幸のかう時三
よのつりくすることもうしてまうを我う利
たうしく二人つ先うてまうを我う利
乃陋兎とそ俱今例とうわい下
い花とれ右い右乃者長一人近来又
人をて六人の陽男をゆうさんくわ

ちくもうなりうれしよ作賀なるの時ハ
将監ね書府生とも又一人ハくそするを
一負そもうら随身ともうこ河まを
みか北下のともうこ藏人のそうとそ
厨よ乃蔡人のね監をいふそしと一負よ
をする事ハ例あきと辺行幸乃紀ハ
左右近衛ね監ね書ハ本陣よ借をうら
うそそそうれ一負にありうる事
もるなる事こ乃一さんの祖父ねうさ
事ら別う猶もうるへ

てをうらあそさひうあくつ
宋朝よ司馬相如といひし一老子ら汾中に
入うしはこれをみるものを新よくふ
という事通鑑とい古よみうり

式部卿宮

あさうか乃ねう老の父ま
斎宮もうさそもの言うねそまをいうきそ
もうるをうこ利ありく

延喜式ら九天皇即位着定伊勢大神宮

斎王仍簡内親王未嫁者

若無内親王者依一世次簡定女王一卜之

訖即遣勅使於彼家告示卜定由神祇祐
以上一人率卜部随勅使共向卜部解
除神部以木綿着賢木立殿四面及内
外門
と業 秋好中宮ハ去年卜定わりあ
いつき諸司へ入給ふすなハ宮よましく
て斯東しるそといふへきまのなるを
とこれしとなし
うきこんのうゑにてまいらる
西宮云 女親王対面 総角着青行衣半臂
下襲表袴玉帯木 又西宮云斎院童女ハ総
角青麹塵行衫半臂下襲青袴白柳
帯
今案童女ハ晴の時ハ打袴表袴ときゝゆ
うきりんハ棄殿なりよのつ袮あらへの
あう梅をいきす
ありあれちひろれ座のみうきのおいはまの我のきをみん
うゝか十一二ゝみのうくしき事みえ
つくりつきとる国ゝ判
ちるちいそうまんゆるあくみちるきのかけらぬよ

源氏は志乃ちひ
さゝる船出仕
ちひろの海
ひさしきものゝ
おとつし屋（ヲトツノヤ）
月の珍（イリエ）村の時中
浦の桑（ニワリ）木阿乃時
一ときにおく（ヲトツノ）
なり

志乃ぬちかひてを
志乃かとい
ある人
かゝるけんそわるやうなる人
姫（ひめ）御前 契
車
ゆく年民の
過

小女（こめ）
くるゝもかなしきものゝあひ（あい）

あ[illegible]日い人今[illegible]のうなるうて
人とあるものもとくもとくしたるわけ[illegible]ると
栄花物語（ゑいぐわものがたり）　[illegible]のうち
[illegible]の条み[illegible]
うさの紙乃[illegible]忘と付うう
今集　栄花（ゑいぐわ）　[illegible]
なる[illegible]
くるうう利て
はうう[illegible]
帥（そち）やう[illegible]

志[illegible]
けるあうう
思うう[illegible]
とあ[illegible]
下の詞よ[illegible]
一首の[illegible]
みうき川乃[illegible]
車[illegible]
[illegible]
さい[illegible]

[illegible]車乃中よ[illegible]
[illegible]
[illegible]

みとにつけてもこひしきは
あさ御ん乃やまあらし
うくるさいふもあ
う乃ちも幸なきさまを
ふる

今もなをあふをたのみ
川をそひくる

これや息(ミヤス)木の生霊(イキリヤウ)
なるうき人いかあ
なあ人幸こ面(おもて)やよみうき川の
あるうきふる恨霊(ソリヤウ)よりを
あ御地なりしのそれ
そ御息所のそれ
つくりそれ哀
被のから人
なり

うつ衆(アサ)の物乃け

息(ミヤスドコロ)所うつ
袖乃ち恋路(こひぢ)い泥(ドロ)
```
```

西行(サイギョウ)ふいにそうちょうより紙(かみ)
大内(オオウチ)へうつりて
来(き)たりて
こうしの西(にし)へ
秋文法司(あきふみのほうし)よ入(い)
へ給(たま)うふとも東川(ひがしかわ)より狭(せま)のわり
うれとこうしの西(にし)へといふなりたし
辞行(じぎょう)の時(とき)の狭(せま)い西川(にしかわ)そあるへ
まこうろうとも
来世(らいせ)をまち婦(ふう)

遺骨（ユイコツ）の事

ここわをしの句

花田うわをけのもう逸

きらめかなかおりもうんや

人のあ衣きいつよ汚ろあるお

袴ときぬとる利

ひろきれおそうみ

喪（も）あるふ

もそ服者（フクシャ）の

物を捨わるり母ふ

此詞（コトバ）衆花（イグバ）地獄

なるものゆきわるめ

人もるるうの

ひろくとわさるさんの如よ

ふのかなそ

ひろくへうへうへうへかな

をの袴

やくそん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

延喜式云仁孝内親王定畢即卜宮
城内使一所爲初斎院稼禊而入至明
年七月斎於此院更卜城外浄野迁
野宮畢八月上旬卜定吉日臨時稼禊
即入野宮自迁入日至明年八月斎於
北宮九月上旬卜定吉日臨時稼禊
入於伊勢宮

今案 斎宮の申しよう三年の御神事
年ごもりの中に又あらたまりて伊勢
入給ふ也

へ入給ふそれもとくみそぎ三年の御神事
ごもりの中に又あらたまりて伊勢
入給ふ也

斎宮の御ありさまやうあれどもこゝ
略す

かのいさよひの月やうあれどもこゝ
是い来摘花の事ゟ二年の秋中ゟ
とゝ物しい事乃事ゟ源氏のそゝつひよ
あひまつ秋の事ゟ打くつさうひの

[illegal] [illegal] [illegal] [

心喪(モ)より御堂(ミダウ)関白張火(ヒカ)色下襲(イロシタカサネ)をゝ着(キ)給
ふうへみそかに政(マツリ)事要略(ヨウリヤク)よこさま(コサイ)和(ワ)
訓(クン)を引

木系(ボク)ゝもろき御涙(ミナミタ)を
後(ノチ)の世(ヨ)今(イマ)この例(タメ)ともや
思(オモ)ふ最(イト)後(ノチ)の春(ハル)日(ヒ)詣(マウデ)
うち久(ヒサ)しうみ
うれを服(フク)去(サリ)の用(モチヰ)文(フミ)
大内山(オホウチヤマ)を思(オモ)ひきこもり
おくら山(ヤマ)こもれる月(ツキ)の
八九大納言(ダイナゴン)亜相(アソウ)宣陽門(センヤウモン)の内(ウチ)の廊(ラウ)
あり右大将(ウダイシヤウ)乃(ノ)亜相(アソウ)を陰明門(インメイモン)乃(ノ)内(ウチ)の廊
よりの利(リ)を申(マウ)す童(ワラハ)の門(モン)の内(ウチ)を西(ニシ)宮
おもよみそうわさの姫君乃(ノ)事
いうあるこのすゑ世(ヨ)利(リ)
も心(ココロ)のうちをもて世(ヨ)をもてあり
ん事(コト)の利(リ)
うきうきみくいさ(ヨ)
萱草(ワスレグサ)よ柑子(カウジ)
ひとをとゝ略(リヤク)

みくりうちき絵みてくりいちと菓(キ)の
もしまろも
うちをこのひみーきつちー作
源氏の君て仕(ツカウ)の御曹司(サウシ)と出(イ)るくつの為(ルス)
のうとをいつ下乃てみつひそて作くろし
みな源氏の事ーへ
なき動そて出(イ)き物語のあくれきつのひて
古(ムカシ)物のさまきこてる源氏五十四帖をしき
一日の花なるへしくろくもまれ
一日前栽(センザイ)よう巻のうくる筆をおく

まよふれの雛(ニワトリ)
みるくよ大文(ムモン)
乃花の枝乃(テナラ)
あるをつなれ
むもんのへ
五いまき作へ風
玄文(ムモン)乃袍(ウヘキヌ)い夏(ナツハ)
袍のなー冠(ナツリ)も玄文(ムモン)寒(コキ)縷服(エリフクヒヤ)者のくろ
ふまろいそ
ふさうくまくりれとくろく

雛(ニワトリ)の
冬(フユノ)
冬平(ツネ)
衣(キヌ)

深衣ハ三ケ月乃服なれハ八月より十
月まてなりけれハ諒服し給ふとつきて
おほしめしけるにけしきにて
おさなきいとけなきわれなりしのひら
くろりてとハ御くろくもし来るみ
之ゝ事なとを云ふ
御ふりひと御丁ねらよ給ひし比の硯
文なとかきて硯をひらくをかさ給ふす
かもらぬ事し給へとよろしく
孫のこそハ何かまてと年ト三ケ一

女くもあんりし
嫁娶乃三日めにあたる夜餅と枕
うミめしとく事ハまつハよろしき事ゝく
人の死ある時めし枕をハ世俗よ申けり餅を
供ぐいなすあり枕へとゝ御申すり
逢あるとうちならぬひとつて女の男の
もとへ見えつりしてハ三てひ又女父
あへ入るゆしきなれハ偕老同穴乃
ちこさりとあつまりくとりけくとつがひ
云帰の字をとり女ハ夫乃

家と我家とわりさく
餅(もち)とりちがへもつ
とくく角(かど)とも入(いり)
ちさ衣裳(いしやう)なと
栄花(えいぐわ)物語(ものがたり)并(ならび)十三
とら并(ならび)やそ
小さうけ(ひ)く
ひろかものつゝもち
みそもするふうし
これを御堂(みだう)殿
所もこうの給ふ時の事も三ノ一を弘
坊(ぼう)よ三昧(ざんまい)一具のの
事(こと)ここの餅(もち)
あるゆへなり
三ノ巻
いまのよりいまの世(よ)
いまの香(か)とこう
もし設(もうけ)あり又一説(とう)あり別(べつ)よ
巻
ひくもちよう

うらく我ふりおかせ事わすれし
これ光いうそんとお納そう思ふ迄
いまさら紀伊守うけとるうち
ほのぐけなき暁月夜の内外のうみ
九まま紀伊守うけるの内義案うかる
紀伊服をと裁縫もうすうき大臣
のおとなう織之
君もをもくのさ海原
これ源氏のもと
そもそうも

源氏君いかにもさうなりぬるを
あこうも
うきみのあこうも迄

以下
3丁
白紙